

南アジアにおける鉄器 —北インドを中心に—

上杉彰紀

Iron Tools in Ancient South Asia: Mainly in the Case of North India

Akinori UESUGI

南アジアにおける鉄器の出現に関しては、従来南アジア外部からの技術伝播によるものとの理解が一般的であったが、近年では南アジア内部での自生説も提出されるようになり、改めて鉄器の導入・普及のプロセスを検討する必要性が生じている。鉄器の導入・普及がどういった社会的背景のもとに生じたのか、逆に鉄器の普及が社会にどのような影響を与えたのか、といった問題にアプローチするためには、鉄器資料の集成とその時空間における位置づけといった基礎的作業が不可欠である。小稿では、北インドを中心に鉄器の集成を試み、現状での問題点と今後の研究課題について述べる。

キーワード：北インド、都市期、前1千年紀、鉄器器種、鉄器の導入・普及

Regarding the introduction of iron tools in South Asia, several theories have been proposed so far. Whether the introduction of iron tools was derived from the regions outside South Asia, such as West Asia, or was indigenous in South Asia is the main difference in those theories. In this paper, the author attempts to collect iron tools in North India and to reveal what kinds of tools existed in the ancient times. On this basis, the process of the introduction and prevalence of iron tools will be discussed. Besides, the problems for future research will be indicated.

Key-words: North India, urban phase, the first millennium BC, types of iron tools, introduction and prevalence of iron tools

南アジアの鉄器に関する研究小史

まず、南アジアにおける鉄器に関する研究史を概観し、問題点の所在を明らかにすることにしよう。なお、鉄（器）に関する研究史については、D. K. Chakrabarti の “The Early Use of Iron in India” (Chakrabarti 1992) に詳しい。

南アジアの鉄に対する関心は18世紀にさかのぼる。ヨーロッパ市場で売買されていた良質の鋼鉄（いわゆる *wootz* 鋼）がインド産のものであるとの認識があり、そうした良質の鋼鉄がヨーロッパでは生産できないという評判が当時存在していたようである。こうした評判を受けて、良質の鋼鉄がいかに生産され得るかという視点から南アジアの鉄に関する研究が進められることになる。また、植民地経営が進む中で南アジア各地での製鉄技術に関する報告もなされるようになる。

19世紀後半になると、歴史的な視点からの南アジアの鉄に関する研究が行なわれるようになる。例えば、中央インドのウーリー・ガオン (Wurree Gaon) 遺跡出土の鉄器が鋼鉄であることが確認されたり、デリーのクトゥブ・ミナール (Qutb Minar) に所在するグプタ朝期（後4世紀）

の鉄柱が鍛鉄であることが確認されたことなどは、南アジアの低炭素鋼の起源が古代にさかのぼることを示し、南アジアにおける製鉄の歴史への関心を惹起することになった。そうした中で、南アジアにおける鉄の起源に関する諸説が提起されることになる。現在の考古学的知見からすれば積極的な根拠を欠くものの、南アジアにおける鉄の起源が前1500～1000年頃にあることが指摘されるようになり、あわせて西アジアからの伝播説や南アジア内部での自生説などが唱えられるようになる。

1940年代にヨーロッパ人考古学者によって層位的発掘方法が南アジアに導入され、ことに1944～1948年にインド政府考古局の長官を務めたM. Wheelerの指導のもとで、層位的発掘と示準遺物の設定による相対年代の決定方法が徹底されるようになる。こうした学問的基盤はインド・パキスタン分離独立後も両国の学者に継承され、今日にいたっている。特に1950～60年代には重要な遺跡の調査が多数実施され、今日の考古学研究の基礎を築いている。

こうした考古学研究の進展のもと、遺跡出土の鉄器を取り上げた研究が進められることになる。その嚆矢はD. H.

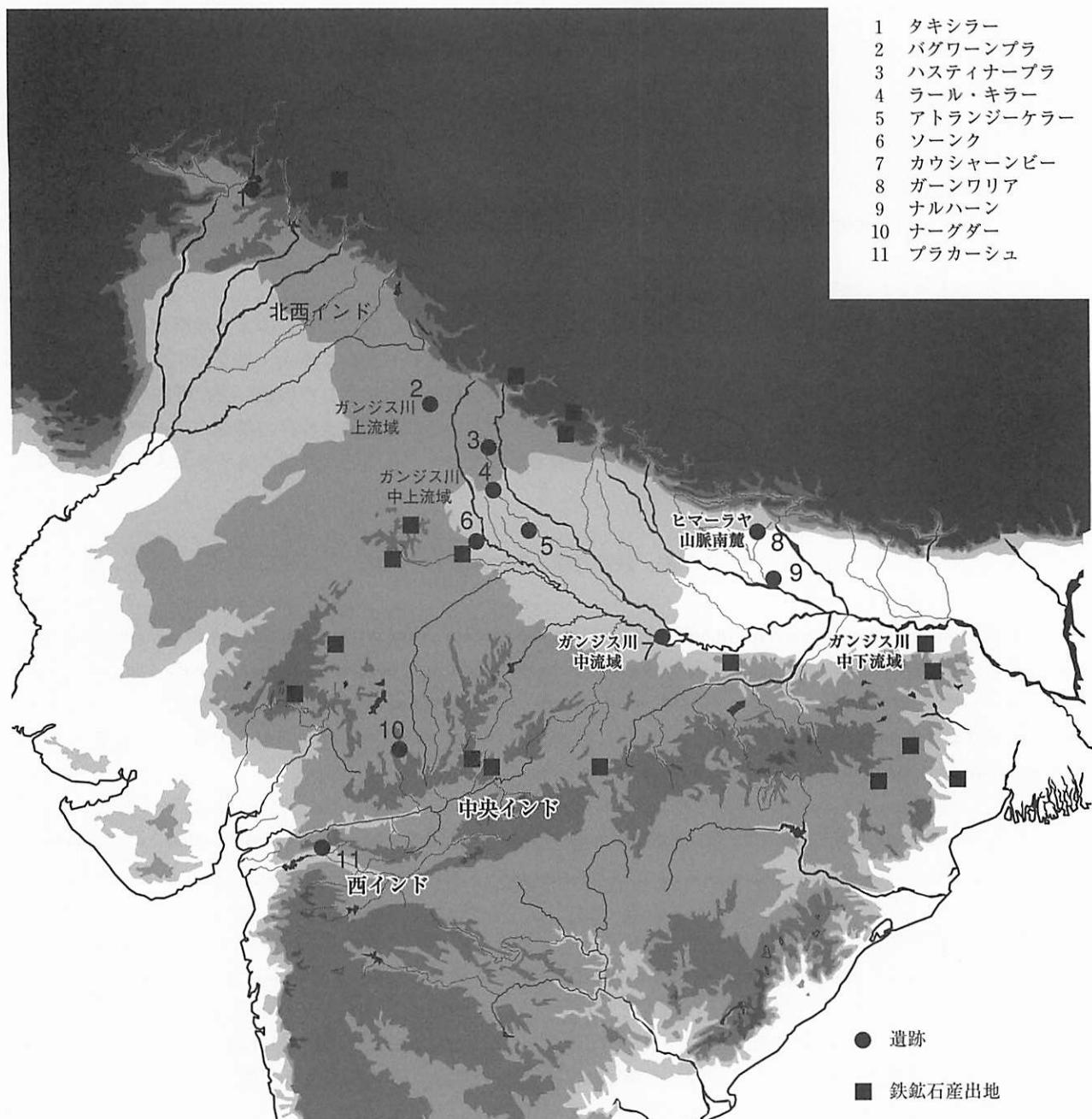


図1 本稿で取り上げる遺跡と鉄鉱資源の分布

Gordonによる研究 (Gordon 1950) で、南アジアにおける鉄器の出現を前700～600年頃に位置づけている。また、Wheelerは南アジアにおける鉄器の出現をアケメネス朝の進出によるものと解釈している¹⁾ (Wheeler 1959)。しかし、ハスティナープラ (Hastinapura) 遺跡の発掘調査 (1952～54年) では、彩文灰色土器に伴って鉄器が出土し、北インドにおける鉄器の出現が前1000年頃まで遡ることが指摘され、GordonやWheelerらの説に対する批判がなされるようになる²⁾。

N. R. Banerjeeは1965年の著書において鉄器出土遺跡の集成を行ない、北インドでは鉄器の出現が前1000年頃

まで遡り、それが彩文灰色土器と深く関わっていることを確認する。さらに、彩文灰色土器をアーリヤ人の土器として位置づけることによって、アーリヤ人の移住に伴って鉄器が導入されたと結論づけている³⁾ (Banerjee 1965)。一方、文献史料の検討を行なったR. Pleinerは①南アジアにおける鉄器の出現がアーリヤ人の移住以降であること、②鉄器の普及が前800～500年頃であること、③鉄器の重要性は前6世紀以降西アジアからの技術的影響のもと次第に増大していったこと、などを指摘している (Pleiner 1971)。

このように、1960年代までの南アジアにおける鉄器の出現に関しては、その年代・伝播元に関して異同はあるも

表1 北インド都市文化期編年表

		ガンジス川上流域	ガンジス川中上流域	ガンジス川中流域	ガンジス川中下流域	ヒマーラヤ山脈南麓				
西暦紀元	VI期	赤色土器段階II期					ナーグダー	プラカーシュ		
	V期	赤色土器段階I期								
	IV期	NBPW後期								
	III期	PGW後期	NBPW前期			都市の形成				
	II期		BRW・BSW後期							
	I期	PGW前期	BRW・BSW前期							
1500BC	バラ文化	埋蔵銅器＝ 赭色土器文化	ガンジス流域 新石器文化		?					

●鉄器の導入●

の、西アジアからの伝播論的解釈が一般的であった。そうした研究の潮流に抗して、D. K. Chakrabarti は南アジア各地の初期の鉄器を出土した遺跡の C-14 年代値を集成するとともに、鉄鉱資源の分布を検討する中で、南アジア内部、特に中央インドから南インドにおける鉄器の自生的出現を主張している。氏は初期の鉄器が出土する地域を 6 つの地域に分け (①バローチスタン地方、②北西インド、③ガンジス川流域、④東インド、⑤中央インドのマールワー・ベラール地方、⑥南インドの巨石墓文化)⁴⁾、中央・南インドの遺跡がバローチスタン地方や北西インドよりも古いこと、それぞれの地域が個別的に鉄鉱資源の産出地に近接していること、初期の鉄器の器種が西アジアのそれに対応しないこと、中央・南インドの製鉄技術が古代から現代まで一貫した連続性をもっていることなどを確認している (Chakrabarti 1976, 1977, 1992)。

Chakrabarti が指摘した鉄器のインド自生説は、かつて伝播説を支持していた V. Tripathi によっても主張されるようになっている。Chakrabarti 同様に、近年の南アジアにおいて蓄積されている資料の検討に基づいており、さらに南アジア各地における鉄器の出現に関しても、一元的な起源・拡散説を否定し、各地での自律的な鉄器生産の開始を主張している (Tripathi 2001)。

また、T. N. Roy は北インドを中心に鉄器出土遺跡の集成を試み、鉄器の出現時期、普及時期について言及しているが (Roy 1983: 157-165)、今現在でも直面する公表資料

の僅少さという障壁がインド人研究者の氏にも立ちはだかっており、具体的な検討が稀薄となっている。

なお、南アジアの鉄器研究の現状については、山田義明氏が適切にまとめている⁵⁾ (山田 1992)。本稿とあわせて参照いただきたい。

伝播か自生かという問題の当否はともかくとしても、Chakrabarti の研究によって、西アジアからの伝播という単純な図式ではなく、地域ごとの様相を見極めていく必要性があることが明らかである。こうした研究の方向性は北インドの場合にも同様であり、資料を蓄積していく中で、鉄器の出現から普及へという過程を把握し、実態に即した評価・解釈を進めていくことが重要である。

こうした研究史を踏まえ、小稿では北インドを中心に遺跡からの出土鉄器資料を集成し、その具体的な内容を明らかにすることを試みる。さらに集成作業より明らかになることをまとめ、現状での北インドの鉄器について歴史的評価を模索する準備とした。

北インドの文化時期区分

本章では、集成にあたって用いる北インドの文化時期区分を提示しておくことにしよう (表1)。北インドに関しては、Wheeler のインド考古局長官就任以降、特徴的な遺物、特に土器をもとにした文化編年の構築が進められてきた。1950～60 年代における主要遺跡の調査によってその大綱が組み立てられてきたが、近年の資料の蓄積により、

従来考えられてきた編年の枠組みでは地域の実相を理解し得なくなっている。筆者は近年増加する資料を北インド内部の小地域ごとに位置づけ、各地の併行関係をもとに北インド都市文化編年（I～VI期）として提示している（上杉1994、1997、1999、2003b）。この編年は広域に分布する土器をもとに編成したものであるが、都市遺跡の出現や遺構・遺物の変遷を把握する上でも有効なものと考えている。以下、各時期の特徴を示す。

1. 北インドⅠ期

おおむね前2千年紀後葉に相当し、ガンジス川上流域において彩文灰色土器（Painted Grey Ware、以下PGW）が、ガンジス川中流域・中下流域、ヒマーラヤ山脈南麓において黒縁赤色土器（Black-and-Red Ware、以下BRW）・黒色スリップがけ土器（Black Slipped Ware以下、BSW）が出現する時期である。これらはいずれも食膳具を主たる器種構成とする精製土器で、以後前1千年紀末まで時間的・空間的に変容しながらも存続する。この段階には鉄器は導入されていないと考えられており、依然として金石併用文化の段階にある。

2. 北インドⅡ期

おおむね前1千年紀前葉に相当し、PGWがガンジス川上流域から中上流域へと分布域を広げるとともに、前代末にガンジス川中上流域まで分布を広げていたBRW・BSWと接触するようになる時期である。ガンジス川中流域・中下流域、ヒマーラヤ山脈南麓では前代に続き、BRW・BSWが分布する。文献史学の研究成果と対照すると、この時期は後期ヴェーダ時代に相当し、初期国家の形成時期にあたる（山崎2003）。考古学的に初期国家の存在を把握しうる調査例はないが⁶⁶⁾、北インド全体で地域間交流が活発化している様子を資料にみることができ、将来的にはより具体的に文献史学との対比が可能になるものと予測する。

3. 北インドⅢ期

おおむね前1千年紀中葉に相当し、ガンジス川中流域・中下流域、ヒマーラヤ山脈南麓において北方黒色磨研土器（Northern Black Polished Ware、以下NBPW）が出現する。「NBPW前期」（Roy 1983、1986）と呼ばれてきた時期にあたる。このNBPWはBRWとBSWの系譜にあるが、製作技法・器形などの点において、精製土器の頂点ともいべき土器である。ガンジス川上流域・中上流域では依然としてPGWが分布していた。文献史学においては、この時期は十六大国の成立と都市の出現という大きな社会変革の時代にあたるが、考古学的にもこの北インドⅢ期に大規模な遺跡が出現していることが確認されている。また、文献史料には商人の発達もみることができる。

4. 北インドⅣ期

おおむね前1千年紀後葉に相当し、北インド各地で精製土器が衰退していく段階で、「NBPW後期」（Roy 1983、1986）と呼ばれてきた時期にあたる。精製土器の衰退の過程で、PGWとNBPWの製作技法・器形レベルでの融合がみられ、いわゆる粗製化したNBPWと粗製灰色土器が出現し、北インド各地、さらには北西インド、東インド、中央インドへと拡散する。文献史学においては、マウリア朝の成立と併行する時期にあたり、北インドの文化が周辺地域へと拡散し、いわゆる「アーリヤ化」が進行する時代である。また、土器だけでなくさまざまな考古資料において、前代までの様相が大きく変化する状況を見ることができる（上杉2003a・b）。

5. 北インドⅤ期

おおむね後1千年紀前葉に相当し、北インド各地で共通した赤色土器を主体とした土器様式が成立する時期である。土器に関してみると、北インドⅣ期までの精製土器の伝統は完全に払拭されている。この時期は北インドではクシャーナ朝の時代に併行するが、北西インドから北インドにかけて、多くの共通要素をもつ広範な土器様式が成立し、さらに東インド・西インド、南インドの一部とも共通する文化要素がみられることから、インド亜大陸全体が活発な地域間交流のもとに置かれていた様子を窺うことができる。このことは、北西インドから西アジア・中央アジアを介した陸上交易と、偏西風を利用してした東南アジア・西アジア・地中海世界との海上交易の活発化を示す文献史料とも整合的である。また、北インドでは、考古学的にみて都市の最盛期にあたり、都市遺跡は150ha以上の面積を城壁によって囲み、都市内部には焼成煉瓦を多用した建物が密集して存在していたことが確認されている（上杉2003b）。

6. 北インドⅥ期

おおむね後1千年紀中葉に相当し、北インドⅤ期の土器様式の基本構造を保持しつつ、細部で変容して成立した赤色土器様式がこの時期を特徴づけている。この時期はグプタ朝の時代に併行するが、ヒマーラヤ山脈南麓では、文献史料（法顯『仏國記』（長澤1971））・考古資料の双方において都市が衰退する状況が確認でき、北インド社会が大きく変容しつつあったことを示唆している。交易活動の衰退やエフタルの侵入などの事件は、北インド社会の変化に拍車をかけたものと考えられるが、全体的には古代型の都市が衰退し、社会の変容が著しく進んだ段階と考えられる。

以上が筆者が提示してきた大別編年案であるが、北インドⅡ・Ⅲ期のPGWの土器様相の細別が現状では困難であり、ガンジス川上流域や中上流域の北インドⅡ・Ⅲ期を明確に区分することは難しい状況にある。将来的により明確かつ細別化した編年案を構築していくことが不可欠である

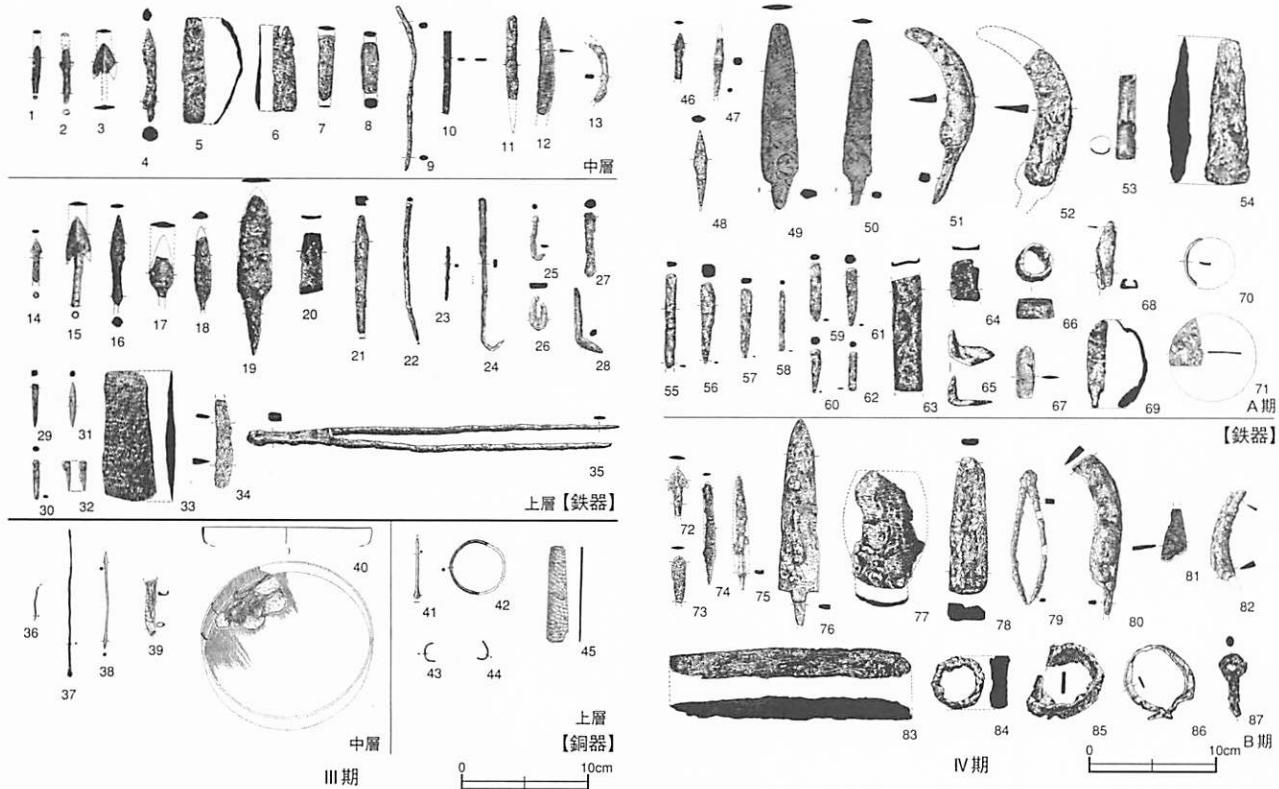


図2 アトランジーケラー遺跡鉄器・銅器①

が、本稿では、ガンジス川上流域・中上流域の北インドII・III期に関しては一括して扱っている。

次章以下では、この北インド都市文化編年をもとに、鉄器資料を集め・検討していくことにしよう。

北インドの鉄器

本章では、北インドを中心に、前1千年紀において北インドと文化的な関係を有した中央インドおよび西インドの遺跡を加えて、比較的まとまった鉄器資料を集め・検討することにしよう。検討にあたっては、北インドのガンジス平原を東西2つの地域に分けることにする。これは上述のように鉄器普及期に相当する前1千年紀前半期においては、ガンジス平原の東西で異なる文化伝統が存在したためで、この点を念頭においてガンジス平原を小地域に分割して検討することが、鉄器普及という現象を考える上で重要と判断するからである。なお、一部の遺跡では、鉄器と銅器の関係を考えるという目的のもと、鉄器にあわせて銅器についても集成を行なった。

A ガンジス平原西半部の遺跡

ガンジス平原西半部は、筆者がこれまでに考古資料の検討において設定してきたガンジス川中上流域に相当する。この地域の北側に位置するガンジス川上流域では、鉄器資料が公表された事例がなく、検討の俎上に載せることはで

きない。この地域は、北インドII・III期において彩文灰色土器が主体的に分布した地域である。取り上げる遺跡はアトランジーケラー（Atranjikheda）遺跡とハスティナーブラ（Hastinapura）遺跡、ソーンク（Sonkh）遺跡である。

(1) アトランジーケラー遺跡（図2・3）

ガンジス川中上流域に位置する遺跡で、I期（緒色土器文化期、前2千年紀前半）、II期（BRW・BSW期=北インドI期）、III期（PGW期=北インドII・III期）、IV期（NBPW後期=北インドIV期）、V期（北インドV期）、VI期（北インドVI期）という文化期区分が得られている（Gaur 1983）。

II期には銅環・玉などの銅製装身具類と瑪瑙を主体とした石核・剥片類が出土しており、鉄器は存在しない。金石併用段階に位置づけられる。

III期には鉄器（1～35）・銅器（36～45）が出土している。遺物は上・中・下の3層に細分して取り上げられている。下層からは棒、釘、鉄滓などが少量出土しているのみで、実測図は掲載されていない。中層では出土鉄器（不定形鉄片、鉄滓を含む）は46点を数え、鎌（1～4）、刀子（12）、鑿（7、8）、針（11）、棒（9）、短冊形板状鉄板⁷（5、6）、環（13）が出土している。上層では81点あり、鎌（14～18）、槍先（19）、斧（33）、刀子（34）、鉤状製品（24～26）、鑿ないし釘（27～32）、火箸形製品（35）、

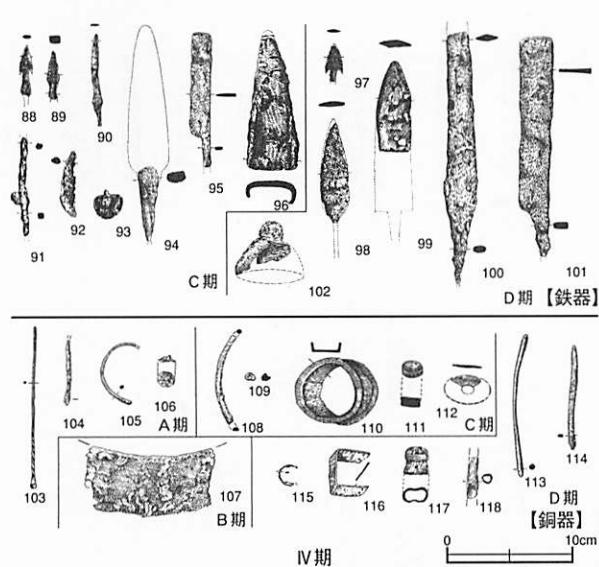


図3 アトランジーケラー遺跡鉄器・銅器②

棒（21～23）短冊形板状鉄板（20）が出土している。銅器についてみると、中層でアンティモニーロッドと呼ばれる化粧道具（以下、単に「化粧道具」とする）（38）、爪研具（37）、皿形容器（40）、細棒（36）、上層で爪研具（41）、腕輪（42）、環（43,44）、短冊形の薄板状製品（45）が出土している。

IV期には、346点の鉄器が出土しており、A～Dの4層に細分されて遺物の取り上げが行なわれている。A期（出土点数147点）では、鎌（46～48）、槍先（49,50,53）、鎌（51,52）、斧（54）、鑿あるいは釘（55～62）、刀子（67）、腕輪（70）、薄板状円盤（71）、不定形製品（63～66,68,69）など、B期（出土点数79点）では、鎌（72～75）、槍先（76）、鋤先（77,78）、鎌（80）、刀子（81,82）、鑿（83）、環（84～86）、鐸子（79）、留金具（87）など、C期（出土点数70点）では鎌（88～90）、槍先（94）、刀子（95）、鋤先（96）、不定形製品（91～93）、D期（出土点数50点）では鎌（97）、槍先（98～100）、刀子（101）、鈴（102）などが報告されている。銅器についてみると、化粧道具（113,114）、耳搔状製品（103）、腕輪（105）、細棒（104）、環（110）、不明製品（106～108,111,112,115～118）などが出土している。

(2) ハスティナープラ遺跡 (図4・5)

ガンジス川中上流域に所在する遺跡で、I期（緒色土器文化期）、II期（PGW期=北インドII・III期）、III期（NBPW後期=北インドIV期）、IV期（北インドV期）、V期（北インドVI期）という文化時期区分が設定されている（Lal 1954）。

II期上層で鉄滓の出土が報じられているが（Lal 1954: 97）、製品が出土するのはIII期以降である。出土した鉄器

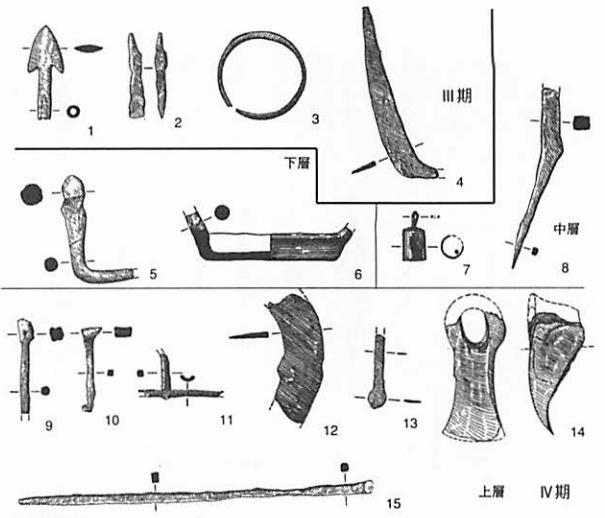


図4 ハスティナープラ遺跡鉄器

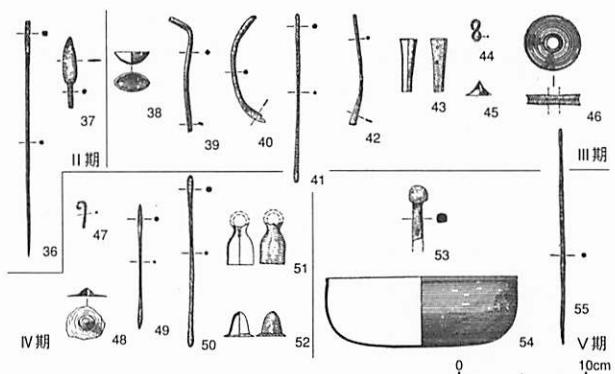


図5 ハスティナープラ遺跡銅器

（不定形鉄片・鉄滓含む）の総数は126点を数える。III期最下層から出土したものとして鎌1点（1）が報告されて

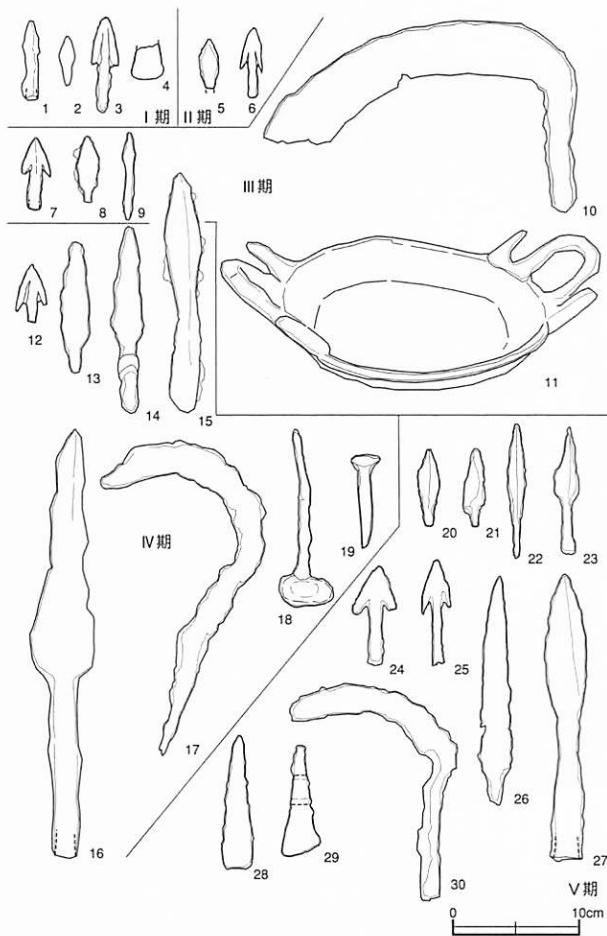


図6 ソーンク遺跡出土鉄器

いる。このほかIII期に指定されるものとして鑓(2)、腕輪(3)、刀子(4)がある。IV期からは、下層で把手付浅鍋(6)、釘(5)、中層から鈴(7)、ツルハシ状製品(8)、上層から釘(9,10)、鎌(12)、斧(14)、不明製品(11,13)などが出土している。V期には、下層から槍先(16,17)、中層から匙(19)、環状製品(20,21)、細棒(23)、不明製品(18)、上層から鑓(24)、鍔先(25)、釘(26~28)、腕輪(35)、細棒(29~31)、不明製品(32~34)などが出土地してい。銅器についてみると、II期上層のものとして鑓(37)、ピン(36)、III期に化粧道具(41)、細棒(39,42)、筒形製品(43)、耳栓(46)、不明製品(44,45)、IV期から化粧道具(49,50)、鈴(51)、不明製品(47,48,52)、V期から鉢形容器(54)、細棒(55)、不明製品(53)が出土地している。

(3) ソーンク遺跡(図6)

ガンジス川中上流域に位置するソーンク遺跡では、I期(PGW期、北インドII・III期)、II期(NBPW後期前半=北インドIV期前半)、III・IV期(北インドIV期後半)、V期(北インドV期)、VI期(北インドVI期)という時期区分が設定されている(Hartel 1993)。

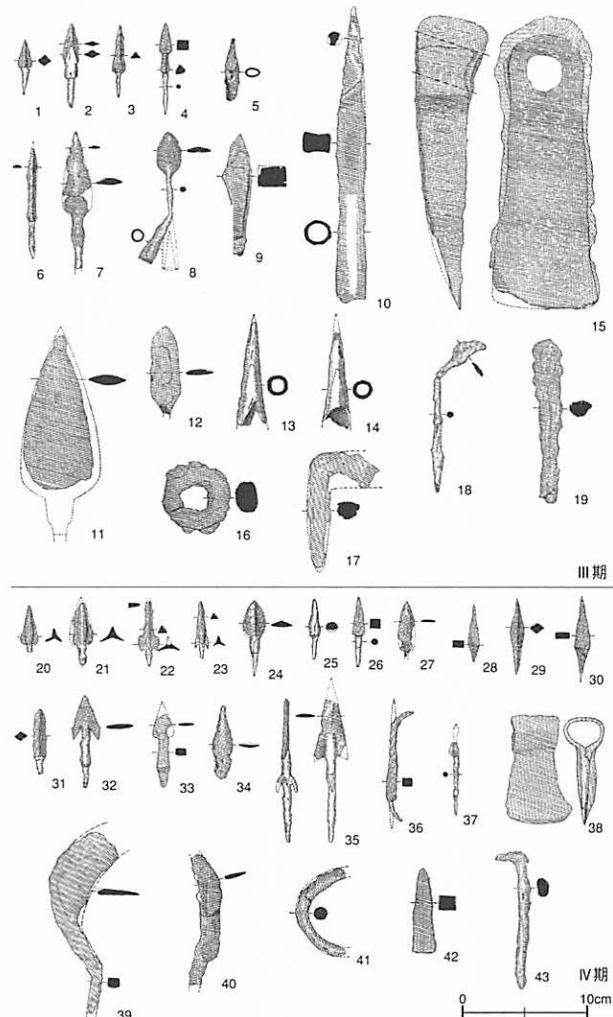


図7 カウシャンビー遺跡出土鉄器

鉄器はI期以降出土している⁸⁾。I期には鑓(1~3)、斧(4)、II期には鑓(5,6)、棒、釘、不明板状製品、III期には鑓(7~9)、槍先、浅鍋形容器(11)、鎌(10)、棒、釘、環、コイル、古代インドの宗教的シンボルであるナンディヤーバルタを取り付けた不明製品など、IV期には鑓(12)、槍先(13~16)、鎌(17)、釘(19)、柄杓(18)、巒形製品、円盤状製品など、V期には鑓(20~25)、槍先(26,27)、刀子(28)、斧(29)、鎌(30)、匙、鈴、不明製品など、VI期には鑓、棒、巒、鑓、釘、鉤状製品、不明製品などが出土している。

B ガンジス平原東半部の遺跡

ここでガンジス平原東半部とするのは、ガンジス川中流域・中下流域、ヒマーラヤ山脈南麓地域に相当する。この地域では北インドI・II期に黒縁赤色土器・黒色スリップがけ土器が、北インドIII期に北方黒色磨研土器が分布した地域である。取り上げる遺跡は、カウシャンビー(Kaushambi)遺跡、ナルハーン(Narhan)遺跡、ガーンワリア(Ganwaria)遺跡である⁹⁾。

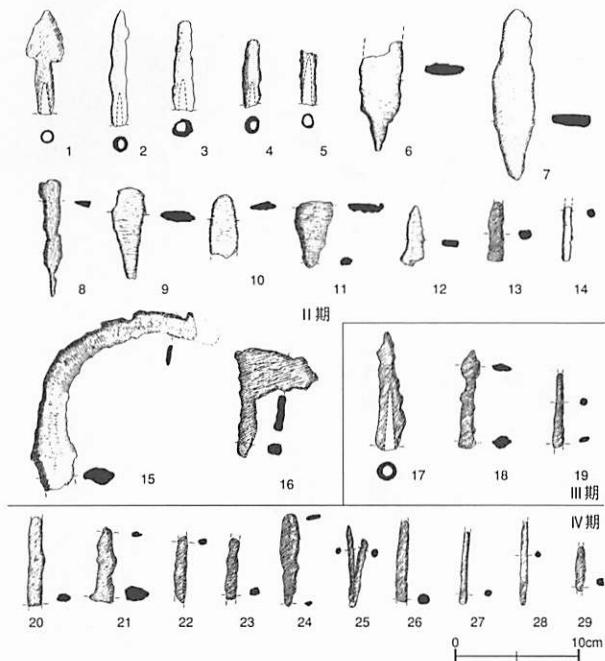


図8 ナルハーン遺跡出土鉄器

(1) カウシャーンビー遺跡(図7)

ガンジス川中流域に位置するカウシャーンビー遺跡では、I期(BRW期=北インドI期?)、II期(BRW期=北インドII期)、III期(NBPW前・後期=北インドIII・IV期)、IV期(北インドV期)という時期区分が設定されている(Sharma 1960, 1969)。

鉄器はIII・IV期に出土しているが、ここでは比較的まとまった資料が出土している城門地区の出土資料(Sharma 1960)を取り上げる¹⁰⁾。III期には鎌(1~9, 12)、槍先(10, 11, 13, 14)、斧(15)、環(16)、棒(19)、不明製品(17, 18)が出土している。IV期には鎌(20~37)、斧(38)、鎌(39)、刀子(40)、釘(42, 43)が出土している。

(2) ナルハーン遺跡(図8)

ガンジス川中下流域に位置するナルハーン遺跡では、I期(BRW期=北インドI期)、II期(BRW期=北インドII期)、III期(NBPW前期=北インドIII期)、IV期(NBPW後期~北インドV期)、V期(北インドVI期)という時期区分が設定されている(Singh 1994)。

報告書に掲載された時期別の出土数量表によると(Singh 1994: 223)、I期の上半部分から鉄器が出土しているとされるが(2点)、報告中に特に記載はなく、その内容は判然としない。II~V期には比較的まとまった資料が出土しており、実測図とともに報告されている。II期には鎌(1~5, 8)、槍先(6, 7, 9~11)、鎌(15, 16)、鑿(12, 13)、釘(14)、鉄滓、不明製品が、III期には鎌(17, 18)、釘(19)が、IV期には鎌(21, 24)、槍先、鑿、釘ないし棒(20, 22, 23, 25~29)、鉄滓、不明製品が、V期には鎌、鑿、

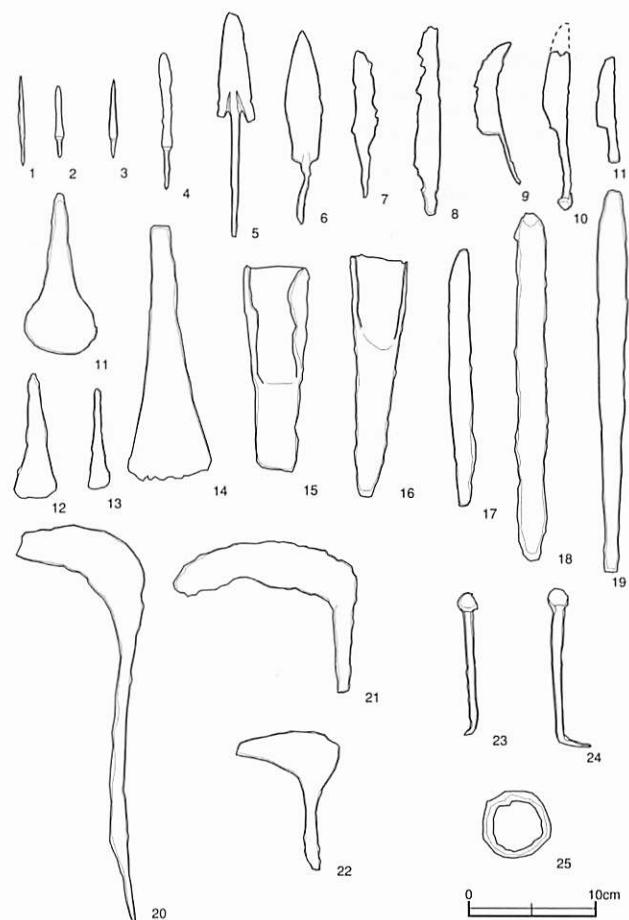


図9 ガーンワリア遺跡出土鉄器

釘、細棒、不明製品などが出土している¹¹⁾。

(3) ガーンワリア遺跡(図9)

ヒマーラヤ山脈南麓に位置するガーンワリア遺跡では、I期(BRW期=北インドII期)、II期(NBPW期=北インドIII・IV期前半)、III期(NBPW後期後半=北インドIV期後半)、IV期(北インドV期)という時期区分が設定されている(Srivastava 1996)。

写真図版にも多くの資料が掲載されているが、残念ながら報文番号と写真図版番号の対照が示されておらず、判然としない部分が多い。ここでは、報文と写真図版をもとに各時期の器種を中心にみておくこととする。なお、写真図版から代表的な器種を抽出して図化したもので、以下の文章中に指示した番号は、III期出土資料に代表させた。

鉄器はI期以降出土しているが、I期は掘棒と鉄片の2点のみであり、II期には鎌、鋤先、鎌、刀子、鉄留板、轡、釘、不定形鉄片など21点が出土している。III期には74点の製品(鎌(1~5)、槍先(6)、腕輪、掘棒(17~19)、ソケット式鋤先(15, 16)、扇形鋤先(11~14)、鎌(20~22)、環(25)、刀子(7~11)、釘、棒)と132点の不定形鉄片、IV期には63点の製品(鎌、槍先、掘棒、鎌、

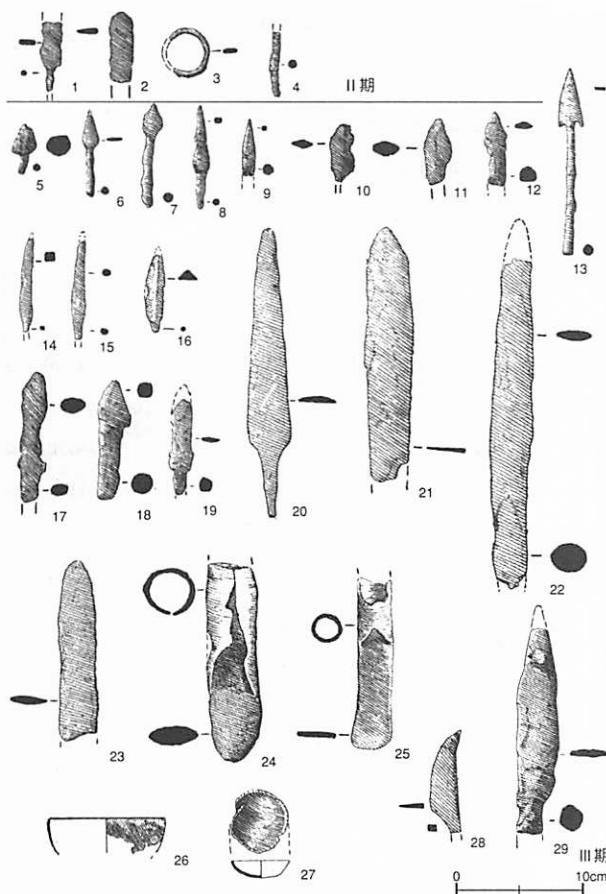


図10 ナークダ遺跡出土鉄器①

刀子、釘、棒、非実用的・宗教的な三叉状鉾先、柄)と104点の不定形鉄片が出土している。

C 中央インド・西インドの遺跡

上述のように、中央インドは前1千年紀を通して北インドと文化的接触を行なっていたと考えられ、鉄器の普及に関しても北インドとの関連性が存在する可能性がある。取り上げる遺跡はナーグダ（Nagda）遺跡、プラカーシュ（Prakash）遺跡である。

(1) ナーグダ遺跡（図10・11）

中央インドに位置するナーグダ遺跡では、I期（デカン金石併用文化期、前2千年紀後半）、II期（BRW・BSW期=北インドII・III期併行）、III期（北インドIV期併行）という時期区分が設定されている（Banerjee 1986）。

鉄器の出現はII期であり、その最下層から鉄器が出土すると報じられている。II期からは59点、III期からは210点の出土が報告されているが、図示されたものはII期のものが4点、III期のものが48点である。ここではそれら図示された資料を中心に検討する。

II期には槍？（1）、刀子（2）、環（3）、細棒（4）が、III期には鎌（5～19）、槍先（20～25）、鎌（30～36）、刀子（28, 29）、匙（37）、斧（41, 42）、鉢（26, 27）、浅鉢

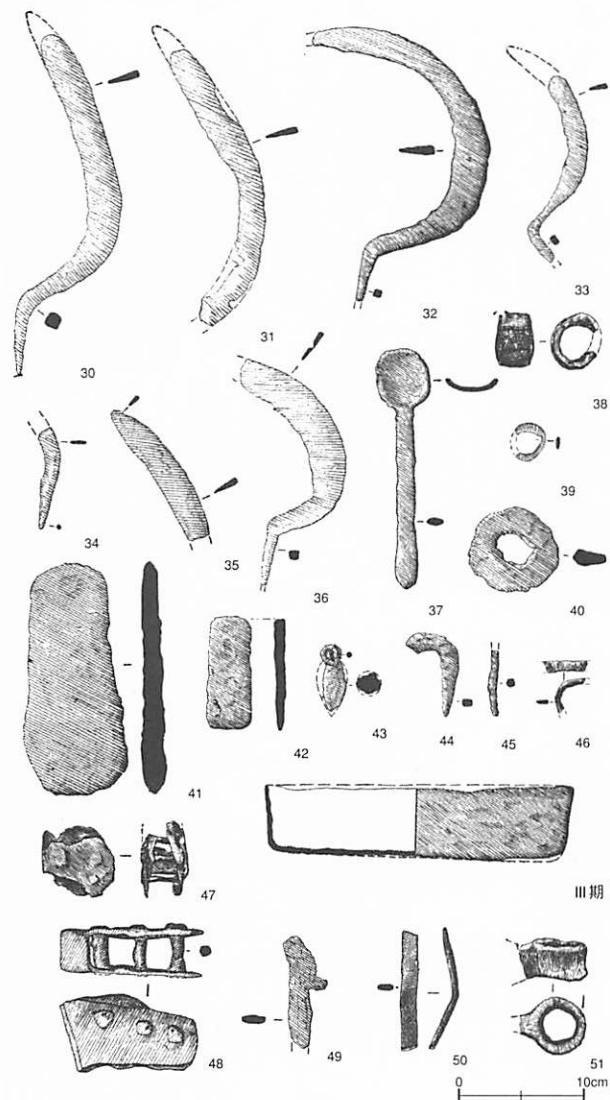


図11 ナークダ遺跡出土鉄器②

形容器（47）、環（38～40）、短冊状鉄板（50）、不明製品（47～49, 51）などが報告されている。銅器では、II期から円錐形製品、化粧道具、細棒、III期から筒形製品、動物形製品、棒、腕輪、ピン、釣針、浅鉢・壺形容器、不明製品などが出土している。

(2) プラカーシュ遺跡（図12・13）

西インドのタブティ川流域に位置するプラカーシュ遺跡では、I期（デカン金石併用文化期、前2千年紀前半）、II期（BRW期=北インドIII・IV期併行）、III期（北インドIV期後半～北インドVI期併行）、IV期（6世紀末～11世紀）という文化時期区分が設定されている（Thapar 1964）。ここではII・III期の鉄器を取り上げる^[2]。

鉄器はII期から出現しており、II期下層には鎌（1, 2, 4）、槍（3）、鎌（7）、刀子（6）、鑿（10）、棒（5）、環（8）、不明製品（9）、中層には斧（12, 13）、上層には棒（15）、不明製品（14）が出土している。III期には下層で斧（17）、

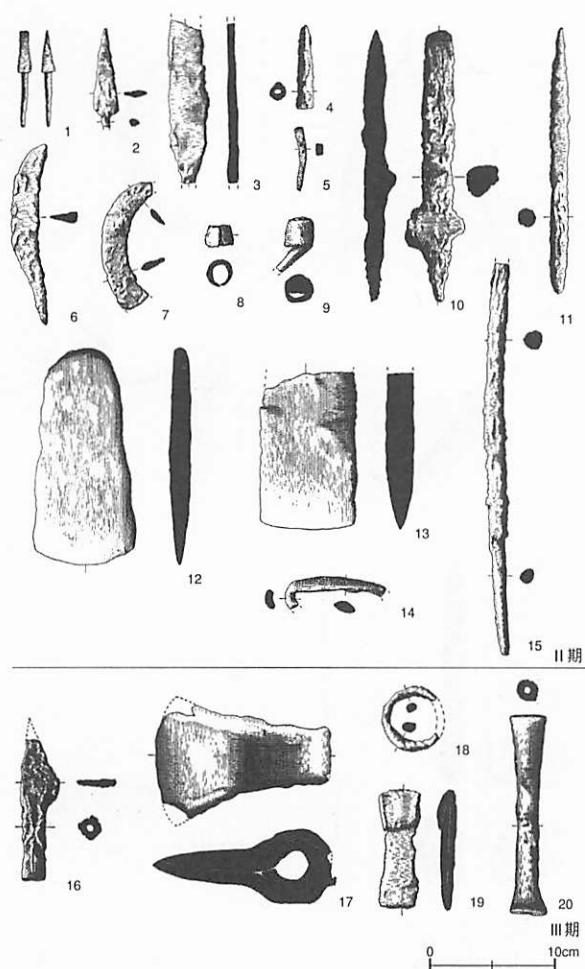


図12 プラカーシュ遺跡出土鉄器

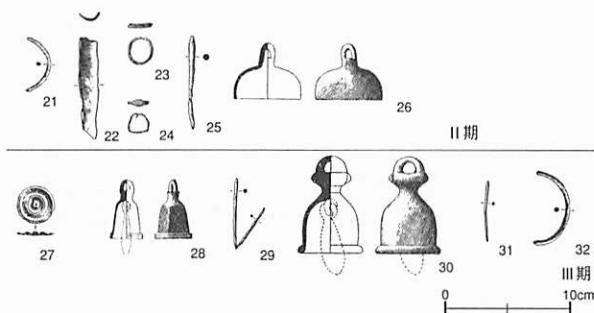


図13 プラカーシュ遺跡出土銅器

槍先（16）、環（18）、中層で斧形製品（19）、筒形製品（20）が出土している。銅器では、II期下層に腕輪（21）と断面が弧状を呈する薄板状製品の破片（22）、上層に化粧道具（25）、指環（23, 24）、鈴（26）、III期下層に化粧道具（29）、鈴（28）、不明製品（27）、中層に鈴（30）、上層に腕輪（32）、化粧道具（31）が出土している。

北インドの鉄器に関する考察

本章では、前章での資料の個別的検討の結果をもとに、

北インドの鉄器の特徴といくつかの関連する問題について考えることにしよう。ここで検討するのは、鉄器の器種構成、鉄器の形態的特徴である（図14）。

1. 鉄器の器種構成

まず、検討の対象とするのは、各時期の鉄器の器種についてである。現在のところ、北インドにおける最も古い出土例は北インドII期に位置づけられる。積極的にこの時期に位置づけられるのは、ナルハーン遺跡II期の例で、BSW主体段階である。この遺跡では先行する北インドI期併行の遺跡編年I期層上半部分からも鉄器の出土が報告されているが、出土数量が少ないと加えて、詳細が不明であることから、ひとまず検討からは除外しておくこととする。ガンジス川中流域のPGW分布域の遺跡の中にもこの時期に属するものが含まれると考えられるが、先述のように、PGWの編年が十分でない現状においては、北インドII・III期を出土PGWによって分離することは難しく、この地域では北インドII・III期を一括せざるを得ない。ナルハーン遺跡では、武器類（鎌・槍先）、工具類（鑿）、農具類（鎌）が出土しており、特定の器種に限定される状況は認められない。

北インドII・III期併行のアトランジーケラー遺跡III期についてみると、武器類（鎌・槍先）と工具類（刀子・鑿・針・斧）、その他（棒・鉤状製品・火箸形製品）などが出土している。同時期のソーンク遺跡では武器類（鎌）、工具類（斧）が出土している。

続く北インドIV期についてみると、アトランジーケラー遺跡IV期には武器類（鎌・槍先）、工具類（斧・鑿・刀子）、農具（鎌先・鎌）、その他が、ハスティナープラ遺跡III期では、武器類（鎌）、工具類（鑿・刀子）、装身具（腕輪）が出土している。ガーンワリア遺跡では、武器類（鎌・槍先）、工具類（刀子）、農具類（鎌・鎌先・掘棒）などが出土している。ソーンク遺跡II～IV期では武器類（鎌・槍先）、工具類（斧・刀子）、農具類（鎌）、容器（浅鍋）が出土している。

このようにみてくると、基本的に北インドII期以降、武器類+工具類+農具類という組み合わせが一貫しており、さらに各類における器種も遺跡間で異同はみられるものの、各時期で共通している様子を窺うことができる¹³⁾。こうした状況は北インドV期においても同様であり、資料が少ないため断定できないものの北インドVI期にも共通していると考えられる。中央インドから西インドに関してみても、こうした北インドの基本組成は変わらない。武器類（鎌・槍先）、工具類（斧・刀子）、農具類（鎌）という組み合わせをみることができる。

また、限定的ながら鉄製容器の出土例もあり、特にソーンク遺跡IV期において出土しているような浅鍋形は、全体

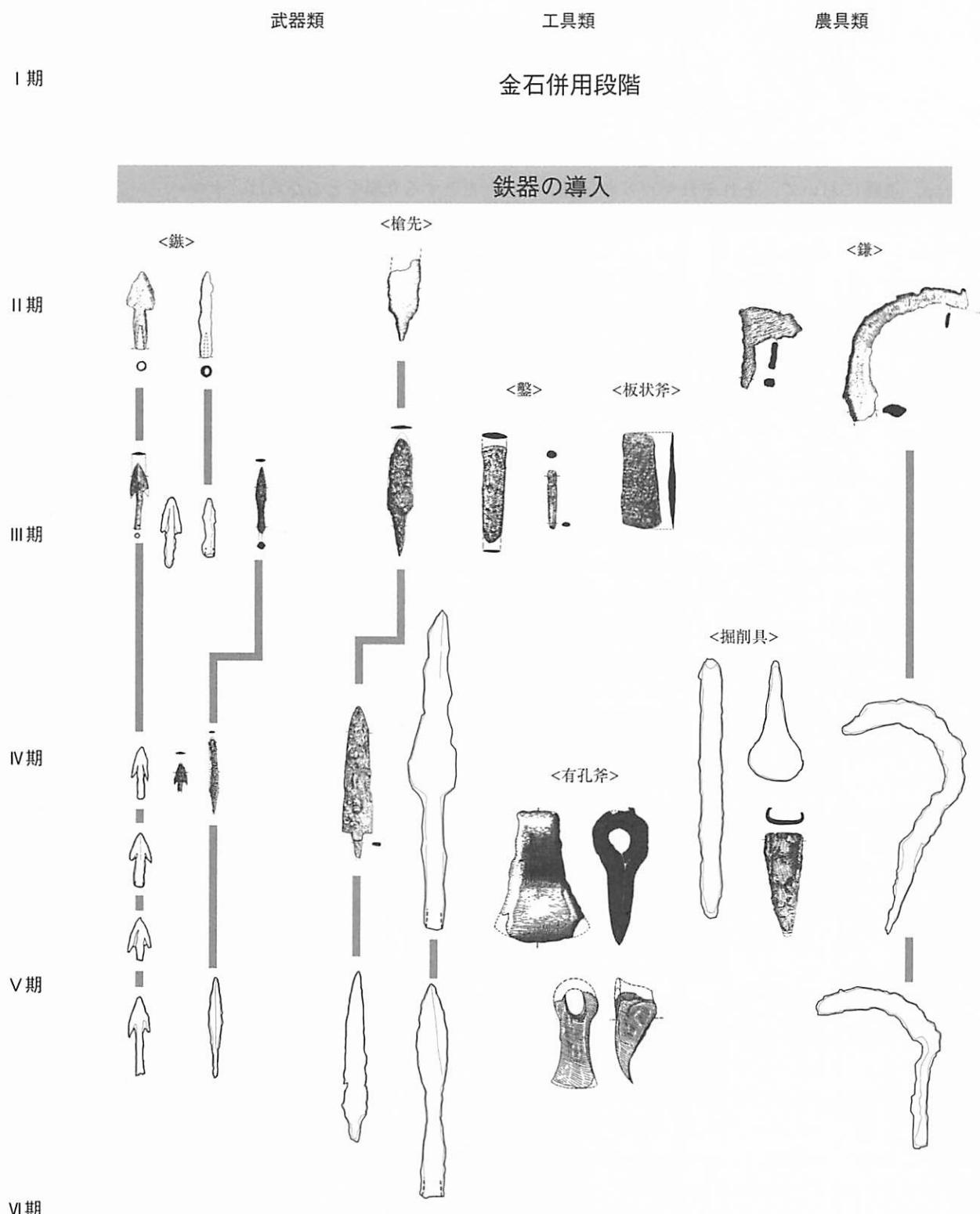


図 14 北インドにおける鉄器の変遷

の器形と把手の形態において共通した特徴をもつ土器が同時期に出土しており、土器と鉄器の互換性が存在したことを見ている。おそらく土器・鉄器ともに調理具として用いられたと考えられる。また、ナーグダー遺跡Ⅲ期では、

半球形の鉢の出土例もあり、当該期の土器に一般的にみられる半球形鉢と同様に食膳具として使用されたのであろう。どの程度まで鉄製容器が普及していたのか判然としないが、一般的な容器素材である粘土に加えて、鉄を利

用したもののが存在したことは、当該期の食膳具・調理具組成を考える上で重要な点である。

ところで、北西インドのタキシラー (Taxila) 遺跡群で出土した豊富な鉄器資料は、これまでみてきた北インドの鉄器組成を補強・確認する。いうまでもなくタキシラー遺跡群は、ビル・マウンド (Bhir Mound) 遺跡とシリカップ (Sirkap) 遺跡において、それぞれマウリヤ朝期、サカ・パルティア期を中心とした遺構・遺物群が広範かつ豊富に検出されたことで著名であるが、ビル・マウンドでは北インドIV期併行層から武器類（鎌・槍先）、容器（鉢・浅鍋）、工具（斧・手斧・刀子・鉄鉗）、農具（鋤先）、その他（匙・柄杓・鉄床？・釘）などが出土しており、シリカップ遺跡でもこのほかに馬具（轡）、容器の蓋、折畳み式椅子などが加わるもの、基本組成は共通している (Marshall 1951: 533-563)。

それでは銅器（青銅器）と鉄器はどのような関係にあるのだろうか。実は、北インドに関しては、鉄器出現以前の金石併用文化期の銅器の内容は今ひとつ判然としない。例えば埋蔵銅器文化 (Copper-Hoard Culture) では、特異な形態をもつ儀器と考えられる器物が存在したが、これらに関しても日常的な道具とは考えにくく、この埋蔵銅器文化と同一と目される赭色土器文化 (Ochre Coloured Ware Culture) の代表的遺跡であるラール・キラー (Lal Qila) 遺跡 (Gaur 1995) においても、銅器の内容は実態が不明である¹⁴⁾。金石併用期の BRW・BSW 段階の遺跡であるアトランジーケラー遺跡II期に関しても、装身具類が若干出土している程度で銅器の利用の実態は不明である。また、鉄器出現以前の PGW 段階とされるバグワーンプラ (Bhagwanpura) 遺跡 IB 期でも、針、爪研具、刀子、化粧道具、腕輪などが出土している程度である。

鉄器出現以降の北インドII期以降の銅器についてみると、化粧道具、容器（皿・鉢）、装身具類（腕輪・指環）などで、鉄器の器種とは明確に異なっており、少なくとも鉄器普及以降は鉄器と銅器で機能による素材の使い分けが行なわれていたことがわかる。そういった意味では、現状では銅器と鉄器の間には大きな断絶があるといわざるを得ない。こうした中で、ハスティナープラII期最下層から出土した銅鎌は、鉄器との共通性を示す興味深い資料である。鎌は鉄器の器種の中でも一般的なものであるが、鉄器の導入以前に鉄鎌の祖形となるものが存在したのかどうか、鉄器導入以後も異素材間で共通した器種が製作・使用されたのかといった問題を提起している。

以上のように、北インドではその「出現」段階から武器・工具・農具の各分野で鉄器が利用されており、特定器種に限定されたり、偏向するような状況は少なくとも現有資料には看取できないことがわかる。現在のところ、北イ

ンドII期に特定できる鉄器資料が限られるため、この時期の鉄器の実態は今後の調査に委ねなければならないが、ナルハーン遺跡の出土資料からみる限り、北インドII期は鉄器の「普及」段階であって、「導入」段階ではないという印象を受ける。鉄器がどのように北インドに出現したかという歴史観にも左右されるが、仮に南アジア内部で自生したとする立場をとるならば、ナルハーン遺跡II期に先行する段階のより限定的な鉄器利用の姿が存在する可能性も否定できない。すなわち、アトランジーケラー遺跡II期にみられる金石併用段階（北インドI期）とナルハーン遺跡II期（北インドII期）の間、あるいは金石併用段階における導入期の鉄器利用のあり方が将来的に確認されることが期待される¹⁵⁾。逆に外来说の立場に立つならば、完成された技術と器種構成がセットとなって北インドに移入されても不思議ではない。現在の資料の状況では、自生説・外来说の当否を断定する研究段階にはないと考えるが¹⁶⁾、ナルハーン遺跡II期の鉄器のあり方をいかに読み解くかが今後の課題であると考える。

北インドIII期には、北インド各地で鉄器が普及している状況を窺うことができるが¹⁷⁾、その器種構成は北インドII期の状況に共通しており、特定の器種がその普及を促進したという様子はない。この時期には都市が成立していたと考えられるが、都市形成、さらにはその背後にいる国家形成の過程において、例えば武器類の集中生産・保有が生じた状況もみられない。また、都市化に伴って森林の伐採、耕作地の開墾などが進行したと考えられているが、例えば伐採用の斧が卓越するような状況も認められない。遺跡に残された鉄器が当時の鉄器組成全体を示すものではないことは当然であり、逆に鉄器資料に鉄器普及の背後にいる社会的背景を明確に見出すことができないのも止むを得ないであろう。あくまでも出土資料に窺うことができるのは、北インドII・III期において、鉄器はさまざまな分野での需要のもとに普及していったということである。

こうした意味からは、現状では北インドII期以降、鉄器利用の画期を見出しにくい状況にある。北インドIV期併行期には、限られた需要のもとであるにせよ、石造建造物（例えばアショーカ王柱や石彫の製作、石窟寺院の開鑿）が行なわれるようになり、こうした場で鉄器の生産・使用が促進されることもあったであろうが、それらは社会全体に鉄器利用の画期をもたらすものとは考えにくく、人々の日常生活の側面においては、北インドII期以降の鉄器組成を変更させるような状況が生じることはなかったと推測される。

2. 鉄器の形態的特徴

ここでは、簡単ながら代表的な器種の形態についてまとめておく。将来的には形態の変化とともに、鉄器の変遷を

より具体的に検討していくことが必要であろう。

(1) 錐

錐には、一見しただけでもさまざまな形態がある。ナルハーン遺跡II期やアトランジーケラー遺跡III期の資料をみると、扁平な断面をもち、左右に逆刺を有するソケット式のものと、逆刺のない細長い錐身をもつものが特徴的である。後者はソケット式（袋状の着柄部）をもつものと、茎をつくりだしたものがあるが、ナルハーン遺跡II期ではソケット式のものが多く、逆刺を有するものも含めて、ソケット式の基部を有するものがより古い段階に属する可能性を示している。ソケット式のものはハスティナープラ遺跡III期、ソーンク遺跡I期においても確認される。ソーンク遺跡I期では、逆刺を有するものでもソケット式ではないものもあり、カウシャーンビー遺跡III期では逆刺を有する茎式のものが卓越している。ガーンワリア遺跡では細身の逆刺をもたない茎式のものが卓越する。

このほか錐形態で特徴的なものとしては、カウシャーンビー遺跡IV期出土の三翼錐（図7-20～23）がある。また、同じくカウシャーンビー遺跡IV期には大形品で、茎の中ほどに棘状の逆刺を設けたものもある。これら特異な特徴を有するものに関しては、明確に時空間的広がりを追うことができないが、注意されるものである。

(2) 槍先

槍先にもいくつかの形態があるが、大別して断面形が扁平な身に茎のつくものと、ソケット式の着柄部をもつものがある。前者はナルハーン遺跡II期、アトランジーケラー遺跡III・IV期、ハスティナープラ遺跡V期、プラカーシュ遺跡II期、ナーグダーレ遺跡III期などにあり、時空間上に広く採用された槍先形態と考えられる。ソケット式のものはカウシャーンビー遺跡III期、ソーンク遺跡IV・V期に例があり、着柄部のみであるが、アトランジーケラー遺跡IV期にもその可能性のあるものが出土している。これら2者の槍先形態は時空間上で併存していた可能性もあり、機能・使用方法が異なっていた可能性もある。

(3) 斧

斧は扁平な短冊状ないし矩形の形態を呈し、柄穴をもたない板状のもの（A類）と、柄穴を設けて柄を装着するものがある。さらに後者には柄を刃に対して垂直方向に取り付ける手斧（B類）と、刃に対して平行に取り付ける縦斧（C類）がある。当然のことではあるが、手斧では刃部は片刃、縦斧では両刃となっている。アトランジーケラー遺跡III・IV期、ソーンク遺跡I期、プラカーシュ遺跡II期ではA類、ハスティナープラ遺跡IV期ではB類、プラカーシュ遺跡III期ではC類が出土している。これらの例からみると、板状のA類が古い形態で、柄穴を有するものは北インドIV期以降のものである可能性がある。A類は柄の

装着方法とも関連するが、伐採・掘削用に用いられた可能性があろう。B類は主として掘削用、C類は主に伐採用として使用されたと推定される。なお、C類はプラカーシュ遺跡III期の例でみると、素材の鉄板を鍛打によって折り曲げて成形しているようである。

(4) 鎌

鎌はいずれの遺跡でも刃部が大きく内弯する曲刃鎌である。ナルハーン遺跡II期にはその可能性をもつものがあり、ガーンワリア遺跡II期、アトランジーケラー遺跡IV期、ハスティナープラ遺跡IV期、プラカーシュ遺跡II期で出土例がある。形態的には刃部が茎に対して平行につくられるものと、刃部が茎に対して直角方向につくられるものがある。

(5) 掘棒・鋤

掘削具としては、棒状の掘棒と側縁を折り曲げて袋状の着柄部を設けたもの、そして扇形ないし撥形の板状鋤先がある。掘棒に関しては、現在でも掘立柱式の小屋を建てる際に、柱穴掘削用の道具として用いられており、同様の使用方法が推定できる。袋状鋤先は刃部幅が決して広くなく、スコップのような土を掘り上げる道具というよりは、掘棒に近いものと考えられる。扇形の板状鋤先は茎と同一方向に柄を装着し、現在除草などの作業に用いられる *khurpā* ないし *khurpi* と呼ばれるものに相当すると考えられる。

現有資料では、より大きな土量の掘削に適すると考えられる掘削具はなく、牛馬に引かせるための犁の先と考えられるものも確認できない。ちなみに、現在掘削作業に用いられるものとしては、ツルハシとB類とした手斧形の道具が主流で、耕作地では牛を用いた犁による耕起作業を行なっている。

(6) 釘

釘とされる棒状製品は、ナルハーン遺跡II期、アトランジーケラー遺跡III期下層には存在しているが、釘としての比定の当否を判断することは難しい。北インドIII期までは木造建築物が主流であったと考えられることから、すでにこの時期までに固定材としての鉄釘が存在しても不思議ではない。また、北インドIV期後半以降には木造建築物に代わって煉瓦積建物が一般化するが、この時期においても屋根は木造であった可能性が高く、また屋根瓦も存在することから鉄釘を瓦の固定用として用いた可能性も十分に考えられる。なお、先端側を折り曲げた例も見られるが、これらは直線状の釘とは異なる使用法が存在したのであろう。

(7) 馬具

ソーンク遺跡IV・V期、ガーンワリア遺跡II期には轡の銜の部分と考えられる例が出土している。ウマや馬具の存在はインド・アーリア人の移住に伴って南アジアに導入されたものと考える見解があり、逆にウマの骨や馬具の出土はインド・アーリア人の移住の考古学的根拠とされるが

(Banerjee 1965)、資料はきわめて散発的・断片的である。サーンチー遺跡の第1ストゥーパの浮彫には騎馬・馬車の光景が多く描かれており、北インドIV期末までには乗馬の風習も一般的になっていたことが窺われ、ソーンク遺跡やガーンワリア遺跡の出土例はそうした状況を断片的に物語っている可能性があろう。

(8) 容器

出土例としてはきわめて限られているが、鉄製容器が存在する（ハスティナープラ遺跡IV期、ソーンク遺跡III期、ナーグダーレ遺跡III期）。ハスティナープラ遺跡やソーンク遺跡の例は把手をもっており、調理具として用いられた可能性が高い。ソーンク遺跡III期が属する北インドIV期、ハスティナープラ遺跡IV期が属する北インドV期には、土器においてもまったく同形のものが存在しており、鉄器と土器で互換的な器種が存在したことを示している。ナーグダーレ遺跡では浅鉢形に加えて半球形の鉢形も出土しており、調理具以外にも鉄製容器が存在したことを示している。しかし、鉄製容器（調理具）がどの程度普及していたのか推測する手掛りはない。一方、銅製品では皿形（アトランジーケラーIII期）、鉢形（ハスティナープラ遺跡V期）が存在しているが、同様にその普及度は不明であり、土器・鉄器・銅器という異種素材間の関係は明らかにならない。

今後の展望と課題

以上、北インドの鉄器を中心に検討を行なってきたが、体系的に鉄器研究を進めるには、資料がきわめて少ない状況にある。公表資料が少ないことも一因であるが、それ以上に鉄器資料のもつ意味を十分に理解し得ていないところに最大の原因があろう。インド独立以降実施されてきた歴史時代の遺跡の発掘調査の件数から考えれば、相当な量の鉄器資料が蓄積されていると推測されるが、調査以降、鋳化が進行し、資料としての価値を減じてしまっている場合も多い。

こうした中で、当面の研究の方向性としては、本稿で若干試みたように、鉄器資料の集成を行なうことが必要であろう。どのような器種・形態の鉄器がどの時期に存在しているのかというごく当たり前の考古学の基礎作業を進めることができ、南アジアにおける鉄器の歴史的意義を明らかにすることにつながるであろう。

特にガンジス平原の都市化の過程で鉄器が一定の役割を果たしたと理解されているが（Roy 1983: 254; ターバル 1986: 131-133）、考古資料からその実態に迫るには絶対的に資料数が少ない。本稿では取り上げなかったが、鉄器生産関連遺構の検出も限られており（ジョードプラー（Jodhpura）遺跡、ウッジャイン（Ujjain）遺跡など）、鉄器の生産・流通のプロセスを復元することはできない。鉄

鉱資源の分布はガンジス平原の縁辺部に限定されるが、これら縁辺部の資源をいかに調達し、製錬・加工していたのかなど、今後の研究課題が多い。

また、本稿では北インドを中心に取り上げたが、南インドでは巨石墓文化に伴ってその副葬品としての鉄器が存在しており、北インドとはまったく異なる歴史的環境の元手の鉄器の展開がある。北インドと南インドの鉄器の分布境界がどこに存在するのかという点も含めて、鉄器導入・普及の比較研究を進めていくことも重要である。

小稿は2002年度の日本西アジア考古学会定例研究会（2002年12月）における発表を骨子として新たに執筆したものである。発表に際しては、参加者の方々から有益なご教示・ご批判を多く頂戴いたしました。頂戴したご教示を小稿に活かせたかどうか心許ない限りですが、御礼申し上げます。また、例会での発表と本誌への執筆の機会を下さった松本健、三宅裕、小磯学、小泉龍人、足立拓朗の諸先生方には深く御礼申し上げる次第です。

註

- 1) ただし、1968年に出版された改訂版では、アケメネス朝をさかのぼる時期に北インドに鉄器が散発的ながら存在することを明記している（Wheeler 1968: 24）。
- 2) ハスティナープラ遺跡の彩文灰色土器文化層の年代に関しては、発掘調査を担当したB. B. Lalが前1100～800年頃に位置づけ、その後彩文灰色土器の実年代に関してこの年代観が広く受け入れられることになったが、ハスティナープラ遺跡にのみ限ってみれば、その年代は前1千年紀中葉（北インドIII期）まで下がる可能性が指摘されるようになっている。ただし、アトランジーケラー遺跡などほぼ確実に前1千年紀前葉までさかのぼる遺跡でも鉄器が出土していることから、鉄器が彩文灰色土器に伴い、それが前1千年紀前葉までさかのぼる可能性は高いと考えてよい。
- 3) インド・アーリア人の軌跡を考古学的に確認しようとする研究は多い。ハスティナープラ遺跡においてPGWがNBPWに先行することを確認し、前1千年紀前半に位置づけられることを推測したB. B. LalはPGWをインド・アーリア人の土器とみなし（Lal 1954: 150-151）。これ以降、前2千年紀後半から前1千年紀前半に位置づけられる「考古学的文化」をインド・アーリア人の所産と考える見解が多く提示してきた。しかし、語族ないし民族を考古学的に把握しようとすることに対する疑問も一方では存在しており、少なくとも北インドにおいては特定の考古学的文化を語族・民族に結びつけることは考古学の研究戦略上においても適切とはいえないと考える。このことはインド・アーリア人の移住と北インドの歴史において彼らが果たした歴史的役割を端から否定するものではないが、筆者は当該期におけるより下位のレベルでの基礎的研究の推進を重視している。
- 4) パローチスターーン地方では、ピーラク（Pirak）遺跡やムンディガク（Mundigak）遺跡、積石墓文化など前1千年紀の遺跡で鉄器が出土し、北西インドではガンダーラ墓葬文化（Gandhara Grave Culture）が鉄器導入期に相当する。これらの地域における鉄器の出現については、別の機会に論じることしたい。
- 5) 山田氏は、南アジアにおける鉄器研究の現状、遺跡出土鉄器の成分分析、製鉄技術など網羅的に紹介されている。

- 6) G. Erdosy はガンジス川中流域での遺跡の分布調査から、この時期に遺跡規模の階層化がみられるとして、首長制社会の発達をみようとしている (Erdosy 1985, 1987, 1995)。筆者は、調査戦略として遺物の散布範囲からの時期別の遺跡規模の変遷を復元することには懷疑的であるが、Erdosy の示したモデルを今後の調査で検証するという意味においては、興味深い研究と考えている。
- 7) 報告書中では「鎌 (clamp)」とされている。
- 8) 鉄、銅、鉛、真鍮各素材の遺物の総数は 571 点とされるが (Hartel 1993: 283)、各層位ごとの鉄器の出土数、総数は明記されていない。
- 9) このほか、ガンジス川中下流域に位置するクムラハール (Kumrahar) 遺跡 (現パトナー市内) でも、北インドIV～VI期にかけての鉄器が比較的まとまって出土しているが (Altekar and Mishra 1959)、残念ながら個別資料の帰属時期 (層位) に関する記録がなく、ここでは取り上げなかった。参考までに出土器種を記しておくと、鎌、槍先、斧、鎌、刀子、釘などがある。
- 10) 1957～59 年に行なわれた城門地区の調査では、総数 1115 点の鉄器が出土している (Sharma 1960: 45)。その内訳は鎌 370 点、槍先 58 点、その他形態のわかる製品 250 点と記録され、このほかに不明の鉄片などが 437 点を数える。
- 11) 報告書には時期別の出土鉄器一覧・数量表が掲載されているが、表の記載と図示された資料の個別観察所見には一致しないところがあり、ここでは出土数量に関しては示さなかった。なお、報文によると II 期の調査面積が最も広範であることから、他の時期に比較して多くの鉄器が出土したことが記されている (Singh 1994: 223)。
- 12) 報告書によると、出土総数は 87 点で、II 期 30 点、III 期 21 点、IV 期 36 点となっている (Thapar 1964: 122)。
- 13) 公表資料が数量的に限定されるため本稿では検討の対象としなかったが、ガンジス川中下流域のヴァイシャーリー (Vaishali) 遺跡では、北インド III 期の層から刀子、槍先、北インド IV 期前半の層から刀子、北インド IV 期後半～V 期前葉の層から鎌、槍先、手斧、鎌、釘、刀子が出土している (Krishana Deva and Mishra 1961: 65-66; Sinha and Roy 1969: 199-200)。
- 14) ガンジス川中上流域に所在するラール・キラー遺跡はそれまで実態が不明とされてきた緒色土器の内容が明確にされた遺跡で、掘立柱建物や炉跡なども検出され、緒色土器文化の集落遺跡と考えられる。ここで出土した銅器はわずか 5 点であり、報文の記載に従えば、ペンダント、玉、鎌、斧が出土している (Gaur 1995: 180-182)。数量が少ないとことから、緒色土器文化における日常的な場での銅器の実態は不明といわざるを得ない。
- 15) この導入期に関して注目されるのは、細石器を伴う遺跡での鉄器の出土例である。例えばウッタル・プラデーシュ州ミルザップル県に所在するバインサウル (Bainsaur) 遺跡では、岩陰とそれに隣接する開地遺跡での調査が行なわれ、非幾何形細石器文化層→幾何形細石器+土器文化層という文化層序が確認されているが、後者の最上層に位置する第 1 層から鉄鎌が出土しているとされる (IAR 1962-63: 37-38)。この遺跡の年代的位置づけは不明であるが、おそらく前 3 千年紀後半～前 2 千年紀後半にかけての遺跡と考えられ、鉄器は前 2 千年紀末ないし前 1 千年紀初頭の層からの出土と推測される。ガンジス川流域の南縁部は、当該時期に新石器文化から金石併用文化への自律的展開がみられた地域であるが (この地域の代表的遺跡としてバインサウル遺跡のほか、マハーガラ (Mahagara) 遺跡、セヌワ (Senuwar) 遺跡、コルディフワー (Koldihwa) 遺跡などがある)、
- ガンジス川流域に比較して新しい時期まで金石併用文化が残存している可能性もあり、バインサウル遺跡における出土鉄器の評価もこの点を踏まえる必要があろう。なお、マハーガラ遺跡に関しては報告書が刊行されており (Sharma et al. 1980; Sharma and Mandal 1980)、新石器文化段階の具体的な内容をある程度窺うことができる。
- 16) ただし、本稿で示したように、北インド内部で自律的に発展してきた BRW・BSW 文化において前 1 千年紀前葉には鉄器が存在していることからみれば、鉄器の導入が他の新たな外来系の文化要素の出現と必ずしも連動していないことがわかる。こうした事例はガンジス川中下流域のチランド (Chirand) 遺跡やソーンブル (Sonpur) 遺跡、バルディー (Bardih) 遺跡でも確認されており、北インド西半部の PGW 文化も含めて、前 2 千年紀末から前 1 千年紀初頭の北インドにおける社会的脈絡の中で鉄器が自生的に出現している可能性を考慮する必要があろう。
- 17) ガンジス川上流域・中上流域の PGW 分布域での鉄器出土遺跡には、本稿で取り上げたアトランジーケラー遺跡、ハスティナープラ遺跡、ソーンク遺跡のほかに、アウタ (Autha) 遺跡 (IAR 1964-65)、ダウラートブル (Daulatpur) 遺跡 (IAR 1968-69, 1976-77, 1977-78; Joshi 1993)、アッラーハブル (Allahapur) 遺跡 (IAR 1970-71)、フーラス (Hulas) 遺跡 (IAR 1978-79, 1979-80, 1980-81, 1981-82, 1982-83; Dikshit 1980, 1982)、アーラムギルブル (Alamgirpur) 遺跡 (IAR 1958-59)、ジャーケラー (Jakhera) 遺跡 (IAR 1974-75, 1975-76, 1985-86, 1986-87)、バーテーシュヴァラ (Batesvara) 遺跡 (IAR 1975-76)、ノー (Noh) 遺跡 (IAR 1963-64, 1964-65, 1965-66, 1966-67, 1968-69, 1970-71, 1971-72)、バイラート (Bairat) 遺跡 (IAR 1962-63)、ジョードプラ (Jodhpura) 遺跡 (IAR 1972-73)、アヒッチャトラー (Ahichchhatra) 遺跡 (IAR 1963-64, 1964-65) など、ガンジス川中下流域・ヒマーラヤ山脈南麓の NBPW 分布域では、シュリンガヴェーラプラ (Sringaverapura) 遺跡 (IAR 1977-78, 1978-79, 1979-80, 1980-81, 1981-82, 1982-83, 1983-84, 1984-85)、ラージガート (Rajghat) 遺跡 (IAR 1957-58, 1960-61, 1961-62, 1962-63, 1963-64, 1964-65, 1965-66, 1966-67, 1968-69)、プラフラードブル (Prahladpur) 遺跡、タキアペル (Takiaper) 遺跡 (IAR 1971-72)、サライ・モハナ (Sarai Mohana) 遺跡 (IAR 1967-68)、チランド遺跡、ソーンブル遺跡、ラージギル (Rajgir) 遺跡 (IAR 1957-58, 1958-59, 1961-62, 1962-63, 1974-75)、オリウプ (Oriup) 遺跡 (IAR 1966-67)、ソーハガウラ (Sohagaura) 遺跡 (IAR 1961-62, 1974-75)、などがあるが、残念ながら正式報告書がなく、その具体的な内容を知ることができない。

引用・参考文献

- Allchin, B. and F. Akkchin. 1982 *The Rise of Civilization in India and Pakistan*. Cambridge, Cambridge University Press.
- Altekar, A. S. and V. Mishra 1959 *Report on Kumrahar Excavations 1951-55*. Patna, K. P. Jayaswal Research Institute.
- Banerjee, N. R. 1965 *The Iron Age in India*. New Delhi, Munshiram Manoharlal.
- Banerji, N. R. 1986 *Nagda 1955-57*. Memoirs of the Archaeological Survey of India No. 85. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Chakrabarti, D. K. 1976 The Beginning of Iron in India. *Antiquity* 50: 114-24.
- Chakrabarti, D. K. 1977 Distribution of Iron Ores and the Archaeological Evidence of Early Iron in India. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 20: 166-84.
- Chakrabarti, D. K. 1992 *The Early Use of Iron in India*. Delhi, Oxford

- University Press.
- Dikshit, K. N. 1980 The Excavation at Hulas and Further Exploration of the Upper Ganga-Yamuna Doab. *Man and Environment* V: 70-76.
- Dikshit, K. N. 1982 Hulas and the Late Harappan Complex in Western Uttar Pradesh. In Possehl (ed.), *Harappan Civilization: A Recent Perspective*, 399-411.
- Erdosy, G. 1985 Settlement Archaeology of the Kausambi Region. *Man and Environment* IX: 61-80.
- Erdosy, G. 1987 Early Historic Cities of Northern India. *South Asian Studies* 3: 1-23.
- Erdosy, G. 1995 The Prelude to Urbanization: Ethnicity and the Rise of Late Vedic Chiefdoms. In F. R. Allchin (ed.), *The Archaeology of Early Historic South Asia*, 75-98. Cambridge, Cambridge University Press.
- Gaur, R. C. 1983 *Excavations at Atranjikheda*. Delhi, Motilal Banarsi Dass.
- Gaur, R. C. 1995 *Excavations at Lal Qila: A Habitational OCP Site & A Unique Copper-Hoard from Kiratpur*. Jaipur, Publication Scheme.
- Gordon, D. H. 1950 The Early Use of Metals in India and Pakistan. *Journal of the Royal Anthropological Institute* LXXX: 55-78.
- Hartel, H. 1993 *Excavations at Sonkh: 2500 Years of a Town in Mathura District*. Berlin, Dietrich Reimer Verlag.
- Krishna Deva and V. Mishra 1961 *Vaisali Excavations 1950*. Vaisali, Vaisali Sangh.
- Lal, B. B. 1954 Excavation at Hastinapura and Other Explorations in the Upper Ganga and Sutlej Basins 1950-52. *Ancient India* 10/11: 5-151.
- Marshall, J. 1951 *Taxila: an Illustrated Account of Archaeological Excavations Carried out at Taxila under the Orders of the Government of India between the Years 1913 and 1934*. Vols. 1-3. Cambridge, Cambridge University Press.
- Pleiner, R. 1971 The Problem of the Beginning of the Iron Age in India. *Acta Praehistorica et Archaeologica* 2: 5-36.
- Roy, T. N. 1983 *The Ganges Civilization: A Critical Archaeological Study of the Painted Grey Ware and Northern Black Polished Ware Periods of the Ganga Plains of India*. New Delhi, Ramanand Vidya Bhawan.
- Roy, T. N. 1986 *A Study of Northern Black Polished Ware Culture: An Iron Age Culture of India*. New Delhi, Ramanand Vidya Bhawan.
- Sharif, M. 1969 Excavation at Bhir Mound Taxila. *Pakistan Archaeology* 6: 6-99.
- Sharma, G. R. 1960 *The Excavations at Kausambi (1957-59)*. Allahabad, The Department of Ancient History, Culture and Archaeology, University of Allahabad.
- Sharma, G. R. 1969 *Excavations at Kausambi 1949-50*. Memoirs of the Archaeological Survey of India No. 74. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Sharma, G. R. and D. Mandal 1980 *Excavations at Mahagara, 1977-78 (A Neolithic settlement in the Belan Valley)*. Allahabad, Department of Ancient History, Culture and Archaeology, University of Allahabad.
- Sharma, G. R., V. D. Mishra, D. B. B. Mishra and J. N. Pal 1980 *Beginnings of Agriculture (Epi-Palaeolithic to Neolithic: Excavations at Chopani-Mando, Mahadaha and Mahagara)*. Allahabad, Department of Ancient History, Culture and Archaeology, University of Allahabad.
- Singh, Purushottam 1994 *Excavations at Narhan (1984-89)*. Varanasi, Banaras Hindu University.
- Sinha, B. P. and S. R. Roy 1969 *Vaisali Excavations 1958-1962*. Patna, Directorate of Archaeology and Museums.
- Srivastava, K. M. 1996 *Excavations at Piprahwa and Ganwaria*. Memoirs of the Archaeological Survey of India no. 94. New Delhi, Archaeological Survey of India.
- Thapar, B. K. 1964 Prakash 1955: A Chalcolithic site in the Tapti Valley. *Ancient India* 20/21: 5-167.
- Tripathi, V. 2001 *The Age of Iron in South Asia: Legacy and Tradition*. New Delhi, Aryan Books International.
- Wheeler, R. E. M. 1959 *Early India and Pakistan* (Revised edition published in 1968). London, Thames and Hudson.
- 網干善教・高橋隆博・米田文孝・上杉彰紀ほか 2000『マヘート遺跡発掘調査概報 1991～1999年度』関西大学文学部考古学研究室
- 上杉彰紀 1994「紀元前1千年紀の北インドにおける土器の変遷」『インド考古研究』第16号 5-20頁。
- 上杉彰紀 1997「北インドにおける精製土器-彩文灰色土器と黒縁赤色土器を中心にして」『インド考古研究』第18号 52-90頁。
- 上杉彰紀 1998「初期歴史時代・鉄器時代における北インドの都市」『インド考古研究』第19号 25-50頁。
- 上杉彰紀 1999「紀元前後の北インドにおける土器の様相-サヘル遺跡出土資料の検討を中心にして」『インド考古研究』第20号 15-62頁。
- 上杉彰紀 2000「初期歴史時代の北インドにおける都市文化の諸相」『インド考古研究』第21号 17～36頁。
- 上杉彰紀 2003a「考古学から見た北インドにおける都市化の諸相」初期王権研究委員会編『古代王権の誕生Ⅱ』95～115頁 角川書店。
- 上杉彰紀 2003b『北インド都市文化の考古学的研究』関西大学提出学位論文
- ターパル、ロミラ（山崎元一・成沢光訳）1986『国家の起源と伝承-古代インド社会史論-』法政大学出版局。
- 長澤和俊（訳注）1971『法顯伝・宋雲行紀』東洋文庫194 平凡社。
- 山崎元一 2003『古代インド一大国時代の王権の諸相』初期王権研究委員会編『古代王権の誕生Ⅱ』81-94頁 角川書店。
- 山田義明 1992「インドの製鉄史研究をめぐって」『たたら研究』第32・33号 1-19頁 たたら研究会。
- なお、本文中の文献註に示したIARは *Indian Archaeology - A Review - (Archaeological Survey of India, New Delhi)* の略。

上杉彰紀
関西大学文学部
Akinori UESUGI
Kansai University